

平成28年度学校評価報告書

【国立市立国立第五小学校】

◇ 専科教員を含め全教員で取り組む ■ 全教員で取り組むが成果確認は担任が行う 無印 担任が取り組む

学校教育目標	中期経営目標(カゴの数字は経営方針の番)	短期経営目標	具体的な方策	評価指標	達成状況		分析	改善策	学校関係者評価
					中間評価	最終評価			
学びあう子「確かな学力」の向上(本年度重点目)	○基礎的な知識および技能の定着(③) ○身に付けた技術を活用する力の育成(③)	①■正しい鉛筆の持ち方を身に付けた児童を育成する	○毎月第1週目は「えんぴつ1週間」とし、「OKマークをくぐる」とまわしてなかゆびまくら」を全校級で確認させ、意識の向上を図る。 ○正しい鉛筆の持ち方ができない児童には、補助具を貸し出し、正しい持ち方を定着させる。 ○正しい鉛筆の持ち方を定着させるには、リズムに合わせて書きこぼす	A 身に付いた児童が、10%以上増加 B 身に付いた児童が、5~10%増加 C 身に付いた児童の増加が5%未満	年度始め 32.2% →45.9% A	54.9% A	・正しい持ち方に対する意欲・意識がまだ低い。 ・全校で使った補助具の代用品であるクリップは、子供によっては手に当たって痛いと感じる。	・鉛筆週間中には、名前を書く際に声掛けをして、正しい持ち方で丁寧に書くという具体的な場面を作る。 ・補助具のあっせんを学校で行う。	・数年前に比べ、教員の指導力は高まっていると思う。児童の実態の分析も高度になってきている。ここで提示される資料も、豊富になってきている。たまたまは、教師の力量に差があるのは感じる。 ・例えば、間違った答えを出した子がいたとしても、その子の背景によって、指導は変わってくるはずである。いつもクラスのリーダーシップをとるような子が発言した時と、めったに発言しない子が頑張って発言した時は、意図的に指導の方法を変える教師であってほしい。
		②学年配当の漢字の読み書きと基本的な計算の仕方を身に付けた児童を育成する	○ベーシックドリル等を活用しながら、前学年までに配当されている漢字の読み書き、計算の練習をさせる。 ○漢字の読み・筆順・熟語の確認・繰り返し書き取り練習を毎日取り入れ継続する。	A 国語・算数の平均正答率が、それぞれ85%以上 B 国語・算数の平均正答率が、それぞれ80%以上 C 国語・算数の平均正答率のいずれかが80%未満	国79% 算80% C	国88% 算88% A	・ベーシックドリルの活用が不十分である。	・6月実施の成果確認の際の、正答率が低かった内容は夏季休業中の宿題にする。その他、活用の場面を各学年再度精査し、設定する。	
		③○自分の思ったことを最後までしっかり言える児童を育成する(言語)	○発問を工夫し、全員が挙手できるような場面を授業に取り入れる。 ○教師が範を示しつつ、子供の発言を最後まで聞く姿勢をもつ。 ○話題を各学級で掲示し、語尾を意識して発言できるよう指導していく。 ○「今日の詩」を掲示して、全校朝会などで発表させる	A できるようになった児童が70%以上 B できるようになった児童が60%以上 C できるようになった児童が60%未満	40.8% C	65.2% B	・「今月の詩」については、研究部の発信が不十分で、クラスによっての取組に温度差が大きかった。	・担任への周知、決定した詩の拡大版作成など、早めに次の準備をする。全校朝会や朝の放送などでも、児童に向けて、発信する。	
		④問題解決に対する見通しをもち、根拠を立てて仮説を記述できる児童を育成する(3, 4年)(言語)	○仮説 ①文型(話題)を用いて表現させる。 ②記述の観点を与える。 →学んだことを活用し、思考力・判断力・表現力を高めさせる。 ○考察 ①記述の観点を与える。 ②記述した文章を友達と交流させる。 →学んだことを振り返り、思考力・判断力・表現力を高めさせる。	A 80%以上の児童が教師設定基準を達成(中) A 55%以上の児童が教師設定基準を達成(高) B 75%以上の児童が教師設定基準を達成(中) B 50%以上の児童が教師目標基準を達成(高) C 教師設定基準を達成した児童が75%未満(中) C 教師設定基準を達成した児童が50%未満(高)	中60.4% 高34.5% C	中69% 高46% C	・教師が適切に児童の学習活動を支援し、方向性を示せば、記述量も質も高まる。 ・根拠立てて考えることが難しい児童が一定数どのクラスにも存在する。	・来年度は研究教科、テーマ、方向性も変わるので、この短期経営目標も一旦終結。	
助けあう子「豊かな心の育成」	○自己肯定感をもち、他人も大切にできる児童の育成(①) ○社会の一員であるという自覚と規範意識をもった児童の育成(③)	⑤○仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いなどのいじめをしない児童を育成する。	○年3回「いじめアンケート」と年2回ふれあい月間のアンケートを実施し、じめ取りを丁寧に行い、全職員で予防策・早期発見に努める。 ○人権月間に、ビデオ・DVD教材を活用し、自分や他の命を大切にしようとする児童の態度を育む。 ○5年生全員とスクールカウンセラーの面談・給食交流を実施しする。また、相談室便りを発行し、相談しやすい環境を整える。	A いじめをしない児童が100% B いじめをしない児童が90%以上 C いじめをしない児童が90%未満	77.5% C	73.7% C	・していいこと、いけないことの区別がつかない児童、理屈では分かっているが、衝動的に行動する児童がいる。 ・相手の反応が面白いという理由で、ちょっかいを出したり、からかったりする児童がいる。	・いじめはどんな理由があっても許されないことだということ、担任、生活指導主幹、管理職が連携して指導するとともに、「いじめの芽」を見逃さず、早めに対処する。	・おおむね、様々な取り組みが一定の成果を上げていると思う。(多少数字が下がっているが)下がったのも、丁寧に聞き取った結果かもしれない、という分析も理解した。
		⑥■自分を大切にし、自分に自信をもてる児童を育成する(オリ・パラ)	○自尊感情アンケートを実施し結果を基に個々に合った自信の持たせ方を教職員全員で共有する。 ○児童の表現活動(文章・発表・作品・演奏・身体等)を交流する場を設け、友達のをよさを伝え合い認め合い、互いを大切にしようとする態度を育む。 ○日頃から、保護者と密に連絡を取り合い、児童のよさや、つまずきを共有し、児童に自信をもたせるようにする。	A 自己受容評価1点台の児童が0% B 自己受容評価1点台の児童が1~15% C 自己受容評価1点台の児童が16%以上		4.7% B	・数値としては少しずつ改善されているが、短期間で大きく変化させることは難しい。	・単なる情報共有ではなく、1点台の児童の生育の背景、行動・思考特性、関わり方のポイントなどを、教職員で共有し、その児童に関わる。	
		⑦○すれ違った先生や外部の方に、適切な(明確な声・一度あいさつした人には黙礼など)挨拶ができる児童を育成する。(言語)	○各学級で年間通して取り組む「あいさつ宣言」を決め、目標達成に向け、すんであいさつをする児童の育成に努める。 ○6年生のあいさつ当番の活動を活発にし、全校児童の手本となるように育む。 ○相手に聞こえる声で、はっきりとした言葉であいさつをする態度を育てる。	A 95%の児童が身に付いている B 90%の児童が身に付いている C 身に付いている児童が90%未満	79.9% C	78.3% C	・あいさつ週間になると、かなり意識して挨拶する児童が増えるが、それ以外の時は、意識が薄れ、声が出ない児童も見られる。	・あいさつのクラス目標を定めたあとでも、毎月必ず確認と指導を行う。 ・あいさつ週間の取り組みは継続し、終了の時には、取り組みの日常化について、指導する。	
鍛え合う子「たくましい体の育成」	○基礎的な体力の向上(④) ○心身の健康づくりに努力する児童の育成(④)	⑧基礎的な体力の向上に努める児童を育成する(オリ・パラ)	○年間15回、木曜日の中休みに「パワーアップタイム」を設定し、クラスごとに、体力向上を図るための運動に、順次取り組ませる。 ○体育委員会による「パワーアップイベント」を学期に一回開催し、体力向上を図った運動を、ゲーム感覚で楽しみながら行う。 ○教室にハンドグリップなどの簡単な器具を置き、握力や手首の強化を児童に促す。 ○各クラスで1年間を通して行える体育的活動を「一学級一実践」として、設定する。 ○柔軟性を高めるために、「くにごストレッチ」を体育の準備運動に取り入れる。	A 休み時間に外遊びをする児童が95%以上 B 休み時間に外遊びをする児童が90%以上 C 休み時間に外遊びをする児童90%未満	84.4% C	76% C	・図書室に行きたい児童や、教室で過ごしたい児童も一定数いて(花粉症なども影響あるか?)どこまで強制的に外に出すか、ためらうこともある。	・教師間で、外遊びについての指導のくい違いがないように確認する。評価指標の見直しをする。 ・3学期に完成したくにごステップの普及に努める。	・取り組みへの姿勢は評価する。一定の成果は出ていると思う。(多少数字が下がっているが)ただ、次年度に向けて、この成果を踏まえ、継続した取り組みによる更なる向上を目指してほしい。
		⑨○自分の体や健康について意識し、健康な生活を送る努力をする児童を育成する。(オリ・パラ)	○体力向上に関するお便りや保健だよりにて、早寝早起きなどの大切さを伝え、保護者への意欲啓発を行う。 ○養護教諭による保健指導を通して、自分の体への関心を高め、健康の大切さを理解させる。 ○健康診断の結果、季節など、児童の実態に応じた健康課題を解決するための活動を保健・給食委員会で取り組んでいく。	A 給食前に「あわあわ手洗い」をする児童が100% B 給食前に「あわあわ手洗い」をする児童が90%以上 C 給食前に「あわあわ手洗い」をする児童が90%未満	86.4% C	85.0% C	・衛生面に関する意識が低い。 ・早寝・早起きについては、今回調査しなかったが、一部夜更かしている。 ・給食週間で眠くなる児童もいる。	・給食準備時間にゆとりをもたせて、手洗いを順番に行かせるなどの、手立てが必要である。 ・給食週間での取り組みを日々の指導でも行い、達成シールを貼って、意欲付けを行っている。	
		⑩■好き嫌いをしないで給食を食べる児童を育成する	○校長講話で、食についての話をし、残菜減量についての意識啓発する。 ○給食指導目標を基に、各学級で、声かけをし、残菜減量に向け声かけをする。 ○食育月間で、発達段階に応じた食育指導を行う。 ○児童の実態に応じた残菜減量のための活動を保健・給食委員会で取り組んでいく。	A 給食を自分で食べることができる量に調節し、完食する児童が100% B 給食を自分で食べることができる量に調節し、完食する児童が90%以上 C 給食を自分で食べることができる量に調節し、完食する児童が90%未満	75.5% C	80.2% C	・「自分の食べられる量に調節する」ことで完食する児童は増えたが、残菜は多い。 ・調節したのに残す児童がいる。	・自分で食べられる量(極端に減らさず)を自分で知る指導も特に低学年では必要。 ・好き嫌いをなくす指導を「食育」の指導と関連させて、どの学年でも徹底する。	

達成状況の指標 各項目の評価指標を参照